Kwansei Gakuin University

エラスムスのHIPPOPLANUS（1524）について

木ノ脇　悦　郎

今回ここに訳出したエラスムスの対話、*Hippoplanus* は『対話集』の1524年8－9月版に新作として載せられた六つの作品の一つである。彼は同年の3月にも新版を出しているので、この年には二つの版が出たことになる。この頃のエラスムスは実に多くの著述を、しかも、多様な著述を精力的になしていたことがわかる。(1)

ところで、彼の『対話集』諸作品の題名や登場人物の名前は、それだけを見ても内容やその背景に関係した事柄、人物を髣髴とさせるものが多い。この作品の題名である Hippoplanus もそのような種類の一つである。彼はギリシャ語をその題名にそのまま用いることもあるが、ギリシャ語からの成語をラテン文字で表す場合もしばしば見られる。そして、その合成語が内容と一致するように仕組まれるのである。したがって、ここでは二つのギリシャ語の単語、Hippo と planus から合成された言葉であることが明らかである。Hippo は ἱππός あるいは ἵππιος、つまり「馬」あるいは「騎士」であり、planus は πλάνος で「騙す」とか「彷徨う」を意味するものである。ここから、二つの可能性が考えられるのである。一つは、馬をめぐって詐欺まがいの騙しがなされたということであり「狡賢い馬喰」とでも訳せるものであり、もう一つは「彷徨える騎士」ということになる。

この対話では、二つの可能性を両方とも十分に満たしているといえる。つまり、話のテーマとしては前者であり、その話の背後にあった事実、エラスムスが揶揄している事柄としては後者の「彷徨える騎士」が状況として浮かび上がってくる仕組みである。ここに想定されている騎士とはハインリッヒ・エッペ

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ンドルフ Heinrich Eppendorf（1496-1551?）であろうと思われる[2]。エッペンドルフはフライブルク近郊のエッペンドルフの生まれであるという。彼自身は常に貴族であると自称しており、後には実際に騎士の称号も受けたようである。1506年にはライプチッヒで、ザクセンのゲオルク侯からの保護を受けるようになり、その縁で1520年夏には、ルーヴァンに滞在していたエラスムスを訪ねている。その際、彼はゲオルク侯からの土産として天然の銀塊を携えてきたのである。エラスムスはゲオルク侯に感謝の手紙を送り、その中で土産の持参人であるエッペンドルフのことを「稀に見る才能ある青年」rara idole iuuenis と称えている[3]。また、同じ頃のほかの書簡にもエッペンドルフ賞賛の言葉を見出すことが出来るのである。こうしてエラスムスとエッペンドルフの親密な関係が始まり、エラスムスは彼に対して大きな信頼を寄せるようになる。1522年5月25日には、バーゼルからゲオルク侯宛に書簡を送り、エッペンドルフがエラスムスの困難な状況の中で慰めであり、彼の貴族的な性格が十分にその生活の中で現れているので、しかるべき地位を与えて欲しいと言う好意的な依頼をもなしているのである[4]。さらに9月には彼の親しい友人であったベアトゥス・レーナヌスとエッペンドルフを伴ってコンスタンツに旅行をし、そこに滞在するというようなこともあったのである。

では、どうして二人の間に亀裂が入り訣別に至ることになったのか。そこにウルリッヒ・フォン・フッテン Ulrich von Hutten（1488-1523）が絡んでくるのである。フッテンは1522年11月にバーゼルに現れ、エラスムスとの面会を求めている。しかし、エラスムスは彼との対面を好まず、フッテンを遠ざけていたのである。ところが、エッペンドルフはフッテンに近づき、彼との関係を深めていくことになる。フッテンとの関係が深まるのと比例して、エラスムスとの関係が次第に冷たいものとなっていくのは当然のことであった。エラスムスとフッテンの関係について詳論することは省略せざるを得ないが、フッテンとしてはエラスムスの冷たい対応に対して文書で抗議し、エラスムスについての批判を公に始めたのである。それに関してエラスムスも沈黙していた訳ではなく、反論をしていくのであるが、状況の進展の中でエッペンドルフはフッテン

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

の側に立ち、エラスムス批判を開始するようになり、その関係は悪化していったのである。

では、何故馬なのか。それについては1523年6月のエッペンドルフ宛書簡から類推することが出来る(5)。つまり、彼らの間に旅行のため馬をめぐってトラブルがあったということであり、エラスムスは彼の批判に対してこの書簡で反論し、特にエッペンドルフが攻撃しているエラスムスの召使について弁護をしているのである。しかも、攻撃されている召使がエラスムスの借りていたフローベンの家の家令についてのものか、あるいはエラスムス自身の召使についてなのかという問題は残るのであるが、ともかく馬の取引をめぐる問題を題材にすることによってエッペンドルフへの批判的見解を明らかにしようとしたのであろう。

以上のことから、*Hippoplanus* の二つの側面が一つになり、その全体を構成する重要な要素であったことが理解できよう。取引の内容について、『対話集』の全訳をしたC.R.Thompsonは馬の売買を扱う馬喰のやり口を車のディーラーに置き換えれば誰にでもわかる一般的な事例としてよく理解できると解説している。

同じ版の中に *Exorcismus sive Spectrum* という作品があり、ここでも人を騙す話が語られていることを思えば、この時代、宗教改革の進展の中で人間の醜い騙しあいがエラスムスにとって大きな問題と感じられていたことが推測されるのである(6)。エッペンドルフに関する批判的な対話作品は、この他に1529年版の **Ἱππεὺς ἄνιππος** *sive ementita nobilitas* つまり、「似非騎士」もあることだけを付け加えておくこととしよう。話者の一人、アウルスはエラスムスであろうし、フェイドロスは問題にされた召使の一人ということができよう。

翻訳に用いた底本は、ASD判全集1－3，p.430—432である。

HIPPOPLANUS

アウルス、フェイドロス（以下、アウル、フェイと略記）

アウル　あれまっ、我らがフェイドロスはなんと厳粛な顔をして、たびたび天

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

を仰ぎ見ているではないか。ひとつ、迫ってみましょうか。やあ、フェイドロス、どうかしましたか。

フェイ やあ、アウルスか。どうしてそんなことを尋ねるのでしょうか。

アウル だって、フェイドロスがまるでカトーにでもなったように、とても厳粛な顔をしているでしょう。

フェイ いや、驚くことはありませんよ。自分の罪を告白していただけなのです。

アウル へえ、じゃあ驚くことは止めにしましょう。でも、本気で何でも告白してしまったのでしょうか。

フェイ 心に浮かんだことは何でもですが。ただひとつの例外を除いてあるのです。

アウル どうしてその一つのことだけは黙っていたのでしょうか。

フェイ なぜって、どうしても私の気に入らなかったからなのです。

アウル それは、きっと楽しい罪なのでしょう。

フェイ それが罪なのかどうか私には分らないのですが、時間があるようでしたら聞いていただけますか。

アウル 勿論、喜んで聞きましょう。

フェイ 私たちの隣人で、馬を売ったり、貸したりしている人の中に大変な欺瞞をする人がいるのをご存知ですか。

アウル いやでも、よく知っていますよ。その人達にはたびたび騙されましたから。

フェイ 最近、私は突然旅をしなければならなくなったことがあるのです。しかも、かなり長い旅で、それも急いでいたのです。それで、彼らの中でも、あなたがそれほど悪くない性格だとおっしゃったある人のところに行きまして、その人と私の間に幾分かの友情も芽生えたのです。私は、ことは重大であり、強い馬が必要なのだと自分に言い聞かせました。そして彼が今まで私に対して自分はよい人間であるように振舞っていたのでしたら、今でもそのように振舞うと思ったのです。彼は

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

私が彼の最も愛すべき兄弟であるように振舞うことを約束したのです。

アウル　多分、彼は兄弟に対しても偽りを行うのでしょう。

フェイ　彼は馬小屋に導いて、どれでも私が気に入った馬を選ぶように言いました。とうとう、多くの中から一頭を気に入り、彼は私の判断に賛成しました。そして、彼は、その馬がしばしばどんな御客からも喜ばれるのだと厳かに宣言したのです。また、彼はその馬を知らない人に委ねるよりも特別な友人のために取っておくことを選んだのだとも言いました。値段についても折り合いがつき、即金で支払い、私は馬に乗ったのです。馬は、あなたがやや荒っぽいと思っていたほどに驚くほど元気に進んで行きました。確かにそれは太って美しい馬でした。ところが、一時間半ほど騎乗しただけで、その馬は全く疲れてしまったのです。どんなに拍車をかけても動かすことが出来なくなったのです。私は、それが見た目には立派でも働くには全く力が無いのに、そのような彼らのペテンに嵌められた人がいたことを聞いたことがありました。それで、私はすぐに気付いたのです、騙された、さあ、帰ったら仕返しをするぞって。

アウル　馬を持たない騎手が、どんな計画を立てるのでしょうか。

フェイ　成り行きがそれを与えてくれました。私は隣の村まで遠ざかりました、そこで、私はある知り合いに密かにその馬を預けて、他の馬を雇ったのです。私は目指していた所に旅立ち、帰ってきました。そして、雇った馬を返しました。それから私は自分の計略に使う馬、つまり太ってよく休んだ馬を返してもらったのです。その馬に乗って騙した人のところに帰りました。私は、もう一度その馬を使うまで、数日の間、馬小屋に預かってくれるように頼みました。彼は私が快適であったかと尋ねました。私はまさにすべての神にかけて厳かに誓ったのです。私の人生でこれほど具合のいい馬の背に乗ったことは無い、歩くというよりまるで飛んでいるようだった、どんなに長い旅であろうとも決して疲れを感じなかった、どんなに働いても毛ほども疲れはしなかっ

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

たと。私は、これが真であると彼に納得させてしまったのです。彼は黙って、その馬が今まで思っていたようなものとは全く違うものだと考えたのです。こうして、私が再び出かける前に、彼はその馬を売ってはくれないだろうかと私に尋ねたのです。最初私は断りました。もし、再び旅に出ることにでもなれば、同じような馬を手に入れることは容易には出来ないでしょうと言ったのです。たとえ、私自身を買いたいというほどに大きな値でも売ることは出来ないほどに、私にとってはそれほど大事なものは無いのだと言ったのです。

アウル 全く！　あなたはクレタ島の人間と素晴らしいゲームをしたのですね。

フェイ 話が冗長でしょうか。ところで、馬の値段を決めなければ、彼は私を離してくれません。私は買い取ったよりはるかに大きな値をつけました。その人から離れて、私はすぐにこの物語の一部を担ってくれる人と準備を整えました。素晴らしく十分に相談をしたのです。彼は家に入っていき、大声で馬を貸してくれるように叫びました。そして言ったのです。えり抜きの仕事に耐えられるような優れた馬が必要なのだと。そして、かの男は多くの馬を見せて、最悪のものを最高に誉めそやしたのです。私に売った馬だけは、私が誉めた通りのものだろうと彼は考えていましたから、決して誉めませんでした。もう一人の人はすぐにそれが売り物かどうか尋ねました。というのは、私は前もって彼にその馬の様子を説明し、場所を知らせておいたのです。馬喰は最初黙っていましたが、野心を持って誉めそやします。他のどんな馬を薦めても、その一頭の馬のことだけを何時までも交渉するので、とうとうその馬喰は考えたのです。自分はその馬について全く間違った判断をしてしまったのかもしれない。なぜなら、この何も知らない人はすぐにすべての馬の中でこの馬に気付いたではないか。彼が固執したので、とうとうそれが売り物であると彼は言ったのです。でもあなたはその値が途方も無いと思うでしょうとも言いました。彼は次のように言いました。その価値に値するのであれば、決して高くはありませ

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ん、値段を決めてくださいと。彼は私自身がつけたよりもかなり高い値段をつけて、それで儲けを得たのです。ついに値段について折り合いがつき、彼は十分な手付を払いました。勿論、金貨で。そして彼はそれが偽りの購買だという疑いなどは持ちませんでした。彼は、馬に餌をやっておくように命じると、しばらくしたら戻ってきて受け取ると言いました、そして馬丁にチップを与えたのです。私はその偽りの取引が上手く成立し、無効にされることはありえないことを確認しましたので、再び旅の用意を整えて件の馬喰のところに急ぎ帰り、息切れしそうに叫びました。彼は近づいて尋ねます。「何かお望みでしょうか」。私は言いました。「すぐに私の馬を用意してくれ。とても重大な用事ですぐにも出かけなければならないのだから」と。彼は言います。「しかし、あなたは数日の間あなたの馬を預かるように、私に依頼したじゃありませんか」。私はさらに言います。「そうだ、だが猶予のならない緊急な仕事が生じたのだ。それは少しも延ばすことの出来ない王様の仕事なのだ」。そこで彼、「ではどれでも好きな馬を選びなさい。もうあなたの馬を手にすることは出来ません」。「なぜ？」「売れてしまったのです」。そこで私は非常に怒りに燃えたように見せかけて言ったのです。「おまえが言うようなことがあってたまるか！こんな重大な旅を前にして、例え四倍のお金を積まれても、私が自分の馬を売るなんてことがあるものか」。私は喧嘩腰になります、そして自分に、ああ、絶望だ！と叫んだのです。ついに、彼もカッとなって言ったのです。「どうしてそのことを詰るのかね。お前さんが馬の値段をつけた。俺はそれを売った。例え俺が値段をつけたにしてもだ、お前さんが俺にとやかく言うことなぞなにも無いはずだぜ。この町にゃ、法律があるんだ。俺に馬を引き渡せって無理強いすることなど出来るわけが無いだろ」。私はさらに長い間、馬を引き渡すか代価を払うか喚き続けましたので、彼はとうとう怒って代価を払うことにしたのです。私は金貨15個を稼ぎました。それは26倍もの価値があると見積もっています。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

彼は32倍の評価をしていた筈です。彼は考えたのです。「馬を返すよりも、この方がずっと儲けになることは請け合いさ」と。私が怒ったふりをして立ち去ろうとしますと、その男は宥めてお金を渡しました。彼はこの損失を他のことで償うからと、私の同意を求めました。こうして、詐欺師が騙されたというわけです。彼は全く値打ちの無い馬を得たのです。彼は手付金を払った人がやってきて代金を払うことを楽しみにしているのです。でも誰も来ることはありませんし、永遠に来ることは無いでしょう。

アウル　それから、苦情を言いに来ませんでしたか。

フェイ　どんな顔をして、どんな権利でそんなことが出来ますか。繰り返し買い手に嘆かせたのですから当然のことです。しかし、私はその人にあまりにも不平を言いすぎたかもしれませんが、あんな馬を私に急いで売りつけた悪い人には丁度よいのです。でも、策略をめぐらせたということが罪なのです、それで私は告白をする決心がつかないでいるのかも知れません。

アウル　私が決心したとすれば、そのように決断することを促すかもしれません。でも告白することは全く無いと思います。

フェイ　あなたのお話を私は心底分ったというのではないかもしれませんが、でも、そのような見せ掛けを非常に楽しむということは印象に残りました。

【注】

(1)　1524年の作品群についての解説は、次の拙著を参照のこと。『エラスムス研究―新約聖書パラフレーズの形成と展開』日本基督教団出版局　1992、315―323頁

(2)　エッペンドルフについての叙述は、次の文書を参照した。(ed.) P.G.Bietenholz, *Contemporaries of Erasmus, Vol.1,* Univ. of Toronto Press, 1985, p.438-441

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

(3) Ep.1125（1520.7.31日付）、E.E.Tom. IV, p.306-307, CWE.Vol.8, p.6-7

(4) Ep.1283, E.E.Tom. V, p.62-63, CWE. Vol.9, p.89-90,この書簡の後、ゲオルクはエラスムスに対してドイツでのルターの活動について反論を書くように依頼する手紙を書いているが（Ep.1298, 7月9日付、E.E.Tom. V, p. 83-84, CWE. Vol.9, p.119-120)、エラスムスは、9月3日の返書の中で(E. E. op.cit., p.125-129, CWE. op.cit., p.178-183）その気持ちの無いことを言明している。つまり、彼は状況の中で自分の立場を貫くことを前提に、混乱しているキリスト教世界の中でどちらかの陣営に属するということを選ばなかったことを言明しているのである。そのことが、エッペンドルフやフッテンとの訣別の原因になったとも考えられる。

(5) この書簡について、エラスムスの場合通常は往復書簡の体裁を取っているが、エッペンドルフからの書簡は残されておらず、この書簡がAllenによって発見されることにより、状況が明るみに出されるようになったということである。Ep.1371, E.E.Tom. V, p.299-300, CWE. Vol.10, p.39-40参照。

(6) この作品、*Exorcismus*については拙論参照。「エラスムスのExorcismus（1524）について」『福岡女学院短期大学紀要』第23号、1987、1—17頁

NII-Electronic Library Service